

普通教室における
Consecutive Interpreting Approach の実践とその考察
自治医科大学看護学部における医療通訳教育の取り組みから

飯塚 秀樹

(自治医科大学看護学部)

The aim of this study was to examine whether the Consecutive Interpreting Approach, designed exclusively for an LL/CALL system environment, is functional or not in normal classroom settings. After a 3-month implementation of medical interpreting training based on this approach, two types of questionnaires were given to 75 students to find out how they perceived this prosody-oriented learning procedure. Initially, a difficulty of preserving SL prosody during English shadowing was the biggest concern. However, this turned out to be a mere presumption after analyzing the data carefully. The results revealed that the 'shadowing' and 'reproduction', which are core elements of this approach, were positively received by the students, thereby signifying the approach to be applicable to the normal classroom environment. The findings also paved the way for further quantitative researches to confirm the effectiveness of this approach.

1. はじめに

2010年6月に閣議決定された「21の国家戦力プロジェクト」の一つに医療国際交流という施策が掲げられている。これは円滑な外国人患者の受け入れを図り、それを受け入れる医療機関を認証するというもので、日本は2020年までに高度医療等の分野においてアジアでトップの評価を獲得することを目標にしている。さらにその達成に向けて、医療言語という医療に関する外国語を操れる人材育成も併せて推し進めることとなった。現在、我が国の高度医療においては、Table 1.の胸部手術に関する国際学会への投稿論文数(Benfield, 2011)から示唆されるように、既にアジアの国々の中でトップの評価を得ていると言えるであろう。しかし一方の医療言語における人材育成については、植村(2009)が“medical English education proved unsuccessful”と指摘しているように、その目標から大きく乖離していると認めざるを得ない。また、医療現場で通訳者としての仕事を担うコミュニティー通訳者に目を向けてみても、多くの場合、病院側の財政的理由等からボランティアという立場に留まることを余儀なくされてお

IIZUKA Shigeki, "A post-implementation review of Consecutive Interpreting Approach in normal classroom settings: a case study analysis of medical interpreting education at School of Nursing, Jichi Medical University," *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 75-93. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

Table 1. Manuscripts in Annals of Thoracic Surgery 2005–2009 (2)

Japan was the most prolific contributor among authors from more than 27 EIL countries that provided about 70% of manuscripts and about 55% of publications.

	2005	2006	2007	2008	2009
Submitted from Japan	382	403	353	395	436
Submitted from EIL nations	1801	1777	1697	1762	1980
Published from Japan	151	128	96	94	115
Published from EIL nations	616	561	512	521	562

り、日本の医療言語を取り巻く状況は、教育面だけでなく、制度面においても多くの課題が残される。鳥飼(2009)はこのような状況が続く限り、医療現場での通訳者不足は改善されず、専門職としての医療通訳者が育成されないことを危惧している。

これらの医療言語に関する背景を念頭に置き、自治医科大学看護学部の語学教育を考えた場合、「医療通訳を兼務できる看護師の育成」という目標が見えてくる。従って、本研究では看護学部という医療・看護における専門性を活かした医療通訳教育を Consecutive Interpreting Approach(飯塚, 2010b)に基づき実践・考察し、本来 LL/CALL 教室での指導に特化した本アプローチが普通教室でどうすれば機能するのかを探ると共に、一般英語・通訳教育にもつながる方略を見出すことを目的とする。

2. 自治医科大学看護学部における語学教育環境

本学看護学部における外国語科目は、基礎科学分野内のいわゆる一般教養科目として位置づけられ、学生は卒業までに英語、スペイン語、中国語の3言語の中から1つを履修することが必須となっている。今年度の英語履修者は75名で、学年構成比は1年生が96%、残りの4%を2年生、4年生が占める。講義は前学期15回のみで完結するため、4年間で学生が語学に接することのできる期間は、課外等を除き、通常4月から7月末までのわずか4ヶ月に過ぎない。また、教室には Power Point や OHP を使用するためのプロジェクター及びスクリーンは備わっているが、CALL システムなど、語学に特化した機材は設置されていない。以上が本学部における語学教育環境の概要であるが、2010年度の Consecutive Interpreting Approach (ibid.)を用いた実践研究時との環境面の違いをまとめると Table 2.のとおりとなる。

Table 2. 2010年度との環境面の違い

	2010年度 公立高校における語学教育環境	2011年度 本学における語学教育環境
① 教室環境	LL 教室	普通教室
② 指導対象者	高校生 39名	大学生 75名
③ 授業回数	50分×週3回×3ヶ月	90分×15回
④ 使用テキスト	文部科学省検定済英語 I テキスト <i>Lingua-Land English Course Revised Edition</i> (教育出版, 2010)	医療系英語テキスト <i>Because We Care</i> (Inoue and Ihara, 2011). Cengage Learning.

上記 2010 年度の研究では LL 教室を活用し、シャドーイングとリプロダクションに基づくプロソディー重視の指導を行った。鈴木(2007)や大木(2011)の研究からも明らかにされているように、シャドーイングの効果を最大限に引き出すためには SL のプロソディー情報が他の生徒の声などにより干渉を受けないこと、そして学習者自身の声が他の学習者に聞かれる心配がないようにメンタル面にも配慮した環境が必要となる。つまり複数の学習者を対象としたシャドーイングの実践には LL や CALL システムなどの学習設備が不可欠と言えるであろう。また、これらのシステムにはモニター機能が付いているため、生徒の進捗状況を個別に把握することができ、よりインタラクティブな指導も可能となる。しかし今年度は普通教室での授業となるため、個々の学習者に合わせた音声指導は極端に難しい。これらの状況に加え、週 3 回と週 1 回という授業頻度の差も学習効果に大きな影響を与えてしまう。認知心理学における情報処理的な見解を第二言語習得に持ち込んだ McLaughlin, Rossman & McLeod (1983) によれば、言語技能の自動的処理は、その前段階の統制的処理を経て初めて達成されると言われ、処理過程に注意を払いながら行われる統制的処理が自動的処理に移行するためには、同じ状況における同一の反応を繰り返し体験する必要があると指摘されている。

このように 2010 年度の環境と対比させると今回普通教室での Consecutive Interpreting Approach の実践は不利な点が目立つが、では具体的に本アプローチのどの部分がこれらの不利な環境により影響を受けるのか。次節ではこのアプローチの全体像を振り返るとともに、普通教室で機能させることが難しい部分を特定する。

3. Consecutive Interpreting Approach

3.1 Consecutive Interpreting Approach の手順

Fig. 1. Consecutive Interpreting Approach の流れ

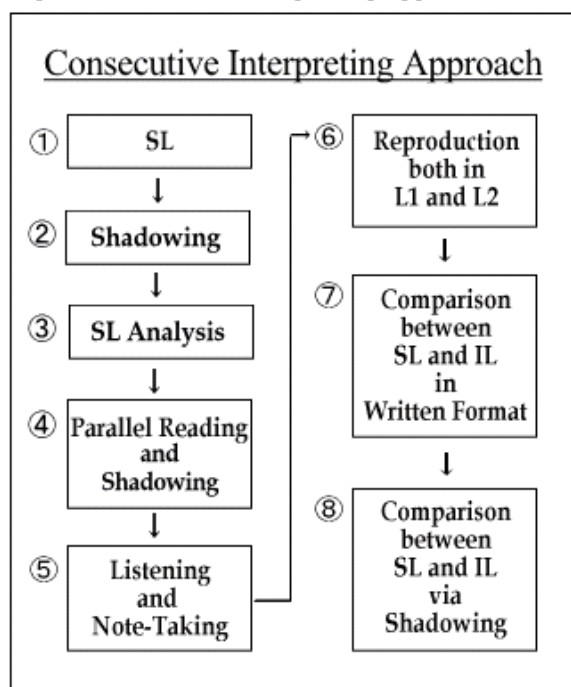


Fig.1. は本アプローチの一連の流れを示したものである。ここでは昨年度の反省を踏まえ、改良点を加えながらそれぞれの手順について解説する。尚、本アプローチ開発に至る理論的背景は飯塚(2009, 2010a, 2010b)に委ねるものとする。

① SL は教科書本文が録音された音声 CD を指す。

② 未知テキストのシャドーイングを文字情報なしで行い、holistic chunk processing (門田, 2003)を促す。つまり、SL 全体のプロソディーを把握させると同時に、内容についても意識を向け、top-down 処理を活性化させる。

③ SL で使われる語法、文法を解説し、

テキストの内容理解を行う。これは従来の読解授業に該当するものである。ここでは通訳教育ということを明確に意識させるため、SL を適切な日本語に訳すことも重点的に指導する。

④ 内容を把握した時点でシャドーイングに移行し、テキストを見ながら行うパラレル・リーディングと、テキストを見ずに意識を内容に集中させるコンテンツ・シャドーイングを交互に実践する。

⑤ リスニングをしながらノートテイキングを試み、リプロダクションに必要となるキーワードを書きとめる。このノートテイキングの作業は通訳教育に初めて接する学生にとって負荷が高く、多くの場合 ZPD¹(最近接発達領域)を超えた活動となってしまう。その場合、一文ずつ共通理解を図りながら、クラス全体でノートテイキングの方法を考える。

⑥ 上記キーワードを見ながら、口頭でのリプロダクションを L1、L2 の両言語で行う。昨年度の研究ではクラス全体で共通のノートを使用したため、ノートの差異によるリプロダクションへの影響を避けることができ、クラス全体のアウトプット傾向を把握することが可能となった。

⑦ L2 で内容を再現できるようになった時点で、キーワードを見ながら IL² (中間言語)を書かせる活動を行う。

⑧ 上記⑦で各自書き出した IL を見ながら再度シャドーイングを行い、SL と IL との違いを明らかにする。これら⑦、⑧の比較活動の中で、IL の中で用いた表現や文法は適切であるか、情報価値は等価であるかを検証し、最後にプロソディー・シャドーイングを用いて、発音、イントネーション、音の連結、弱化、吸収など音声上の違いも詳細にわたり分析する。

以上が Consecutive Interpreting Approach の手順となるが、本アプローチによりもたらされた学習効果、そして指導後のアンケート調査について簡潔に触れたい。

3.2 Consecutive Interpreting Approach による学習効果、及びアンケート調査

3.2.1 学習効果について

昨年度の量的分析からは以下の3点が明らかにされた。

- ① 事前・事後間のリスニングテストにおいて有意な点数の伸張がみられ、特に成績下位群に上記アプローチは高い学習効果をもたらした。
- ② 文法問題が 53%を占める定期試験において、統制群が有意に平均点を下げている中、実験群のみが得点を維持した。つまり、本アプローチは文法の定着にも良い効果をもたらすことが観察された。
- ③ 中間言語分析のために書かせる活動を取り入れたところ、実験群 39 名の SL 平均再現率は Lenient Scoring³ で約 85%に達した。そのため、本アプローチは言語産出、及びライティングにも好影響を及ぼすことが示された。

3.2.2 アンケート調査について

指導後のアンケート調査では本アプローチに対して概ね良好な感想を得たが、ここでは改善の必要性を示唆する調査結果のみを以下の3項目に分けて取り上げる。

<発音について>

- ・ シャドーイングの前に単語の発音の練習をして、覚えてからシャドーイングに入りたいと思いました。
- ・ 動画などもつけて口の動かし方なども見ることができれば良いと思いました。

<授業形態について>

- ・ 1日に10回もシャドーイングをやると疲れて授業に集中できなくなり、英文も頭に入らなくなる。
- ・ 教科書の進度が遅くなると思いました。

<リプロダクションについて>

- ・ 書くよりも早く英文を覚えられるが、細かい前置詞などがあやふやになる。
- ・ 頭の中で英文が出てきてもその単語のスペルが書けなかった。

なお、昨年度の研究では上記 Fig.1. の手順③ SL Analysis 以外はすべて LL 教室で行った。前述したように、LL 教室ではヘッドセットを介し、各生徒のシャドーイング状況をモニターすることができるため、プロソディー獲得上困難と思われる部分の特定が容易であった。またリプロダクション時においても再生に時間を要する箇所の把握ができ、よりの絞った指導が行えた。このように生徒からのフィードバックを直接得ながら指導が行え、同時に生徒自身もプロソディー情報を正確に捉えながら学習できるという点が LL/CALL 教室のメリットと言える。しかし今年度はこのような環境は望めない。つまり、本アプローチを普通教室という環境下で実践する場合、Fig.1.の②Shadowing、④Parallel Reading and Shadowing、⑧Comparison b/w SL and IL via Shadowing の3部分が音声機器の欠落によりネガティブな影響を受けてしまう。では、これらの問題点にどう対処していけば良いのであろうか。以降では今年度における学生の英語力を把握した上で、授業実践をとおしてその対策を考える。

4. 学生の語学力調査

4.1 TOEIC 練習問題⁴を用いた英語力調査

本アプローチを普通教室で実践するにあたり、まず今年度の英語履修者の全体的な語学力傾向を調査した。調査方法として TOEIC 練習問題を取り上げ、各パートの出題形態を損なうことのないように注意深く問題を圧縮し、Listening 領域から28問、Reading 領域から25問を出題した。以下の Table 2. 及び Table 3. は調査結果の記述統計値である。

Table 3. リスニングテスト結果

N	Min	Max	Mean	SD
75	5	19	11.96	3.156

出題数 28 問

Table 4. リーディングテスト結果

N	Min	Max	Mean	SD
75	6	22	14.23	3.339

出題数 25 問

リスニングテストの結果を見ると、出題数 28 問(1 問につき 1 点、満点 28 点)に対し、75 名の平均得点は 11.96 であり、この値から全体の平均正答率を導き出すと 42.71%となる。これは乱暴な推測ではあるが、正規の TOEIC リスニングテストの満点値は 495 点であり、その 42.71% の正答率でスコアを算出すると、211.41 点、つまり実際の TOEIC スコアに換算すると約 211 点と考えられる。

同様にリーディングテストの結果は、出題数 25 問(1 問につき 1 点、満点 25 点)に対し平均得点は 14.23、そして平均正答率は 56.92%となる。そこから TOEIC リーディングスコア(満点値 495 点)を導き出すと約 282 点という値が得られる。

実際の TOEIC ではリスニング及びリーディングテストの問題数はそれぞれ 100 問あり、合計 200 問に達する。従って、疲労による情報処理力や注意力の低下を鑑みると、上記合計得点の 493 点をほぼ上限とする点数が、今年度における英語履修者の TOEIC 平均得点と考えられる。尚この値は、日本の大学生の TOEIC 平均点が 450~480 点とする小松(2005)の指摘にほぼ合致する。

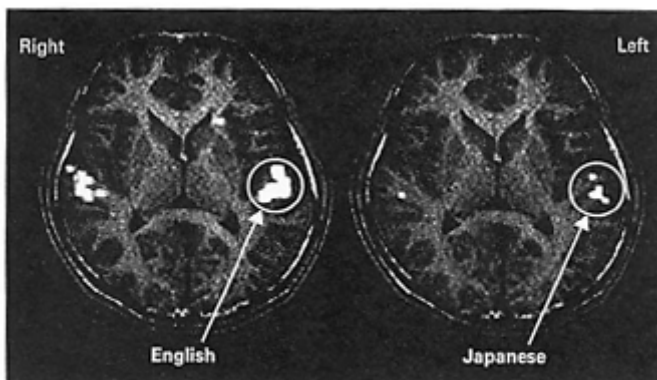


Fig. 2. Functional Magnetic Resonance Image (fMRI) on a non-bilingual subject.

ここで注意すべきことは、リスニングとリーディング間の正答率の差異である。上記スコアを見てみると、リーディングの正答率は約 57% にも達しているが、リスニングの正答率は 43% 程度に過ぎない。この 14% の差異からは日本人学生の外国語学習環境、つまり、音声を中心に捉える学習というよりは、リーディングにより多くの時間を費

やしてきたことが窺える。大脳皮質を細胞学的な違いにより 52 の領域に分類した脳地図によると、一般的に音声言語の理解に係わる部位としてウェルニッケ言語野が知られている。これまではこのウェルニッケ言語野全体が1つの集合体として音素を識別し、その内容を理解すると考えられていた。しかし、Ojamann & Whitaker(1978)や植村 (op.cit.:10)によるバイリンガルの脳に関する研究によると、ウェルニッケ言語野の中に、さらにそれぞれの音声言語理解を司る独立した2つの部位があることが特定された。Fig.2. (ibid.)は英語の読み書きはできるが、英語でのニュースを聞き取ることができないモノリンガルの脳の fMRI による断面図である。これを見ると英語、日本語に係わらず、それらの音声に接した場合、脳内の同じ部位が活性化していることが分かる。

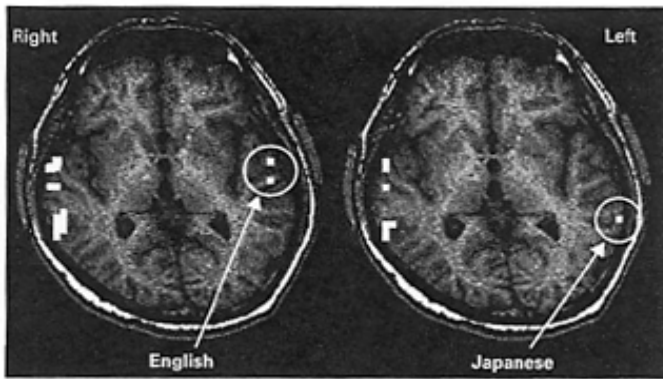


Fig. 3. fMRI on a bilingual subject, the author.

一方、Fig.3. (ibid.) のバイリンガル
の脳においては、それぞれ異なる
部位が反応している。これを受け
植村 (ibid.) はリスニングとスピー
キングを中心とする練習を用いて、
この独立した部位を発達させない
限り、外国語音声の理解は難しい
と説いている。これはたとえ普通
教室においても外国語指導を行う
場合、音声を扱うトレーニング

は軽視できないということを示す重要な論拠の一つと言えるであろう。以上、今年度における英語履修者の全体的な語学力傾向及びその考察を試みたが、次に正答率の低い問題を分析することで、どのような語学力が欠けているのかを特定し、その対策を考えたい。

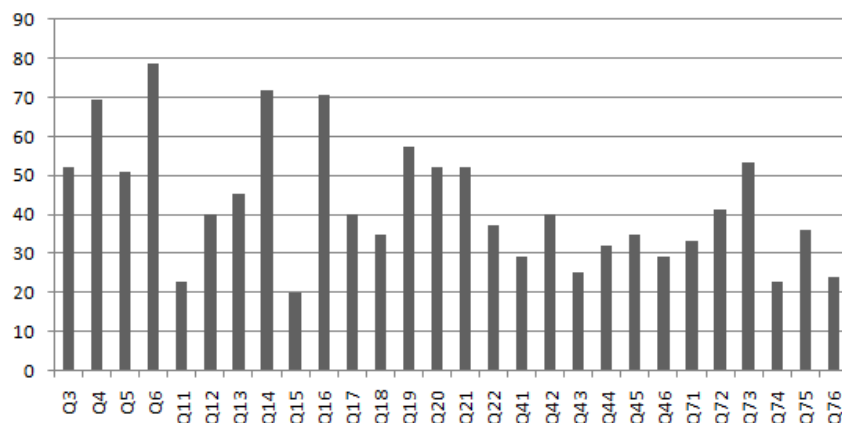
4.2 低正答率問題の分析とその対策法

4.2.1 リスニング問題分析

Fig.4. はリスニングテストの各問題に対する正答率である。正答率 25% を切る問題は Q11、Q15、Q74、Q76 の 4 問⁵あり、ここではそれぞれの誤答分析をもとに低正答率の理由を探る。

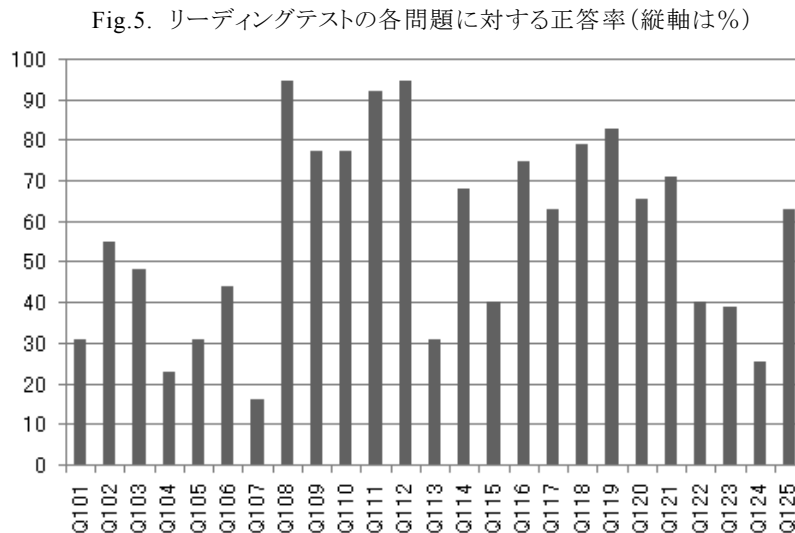
まず、Q11 は現在の学生が持つ computer literacy に関する用語が解答時に干渉してしまったこと、あるいは drawer という語彙に馴染みがなかった点が原因として考えられる。つまり folder や document という語彙からは drawer が連想されず、その結果 (B)、(C) の選択肢に誤答が集中し、folder という語から消去法的に the letter を含む (C) を選んでしまったと推察される。Q15 では made reservations という表現の意味を捉えきれず、the whole group という聞き取れた部分のみで解答してしまった結果、誤答が (B) に集中したと思われる。Q74 と Q76 に関しては 130 語程度のパッセージを聞き質問に答える問題であるが、本番の TOEIC を踏襲しメモを取ることを禁じたため、パッセージ後半の the children や in three weeks などの聞き取り易い語句から解答を選んでしまったことが読み取れる。

Fig.4. リスニングテストの各問題に対する正答率(縦軸は%)



4.2.2 リーディング問題分析

同様に Fig.5. はリーディングテストの各問題に対する正答率であり、正答率 25%を下回る問題⁶を取り上げ分析する。



Q104 は前置詞に関する問題であり、誤答が for に集中していた。考えられる理由としては、基本的な前置詞の用法を押さえていないこと、そして学位に関する用語知識の欠如が挙げられる。また、Q107 は former と previous の使い方に関する語法上の問題で、日本語訳を基準に考えた場合、「かつての」、「もとの」、「以前の」、「前の」などと訳され、正解を導くことはできない。

4.2.3 低正答率問題の対策法

まず、Q107 のように日本語訳からは解答が特定できない語法上の問題に対し、どのような対策が有効であるのか。門田(2007)はシャドーイングの効用として、音韻ループが効率化し、新しい語彙や構文などの学習事項が内在化されると指摘する。つまり、シャドーイングによるプロソディー獲得の過程の中で、音として、または語感として表現を内在化させることが上記問題の主な解決策と考察される。同様に Q104 の前置詞の問題についても、文法という理論に基づく解答のみではなく、プロソディー感覚に基づいて解答させることで、より正答率が高まると考えられる。私達指導者は感覚に依存する解答よりも理論に基づく解答を求めがちであるが、感覚とは学習項目が自動化されている状態に等しい。これらの 2 つの問題からはリーディング問題であってもプロソディー感覚を高める必要性が示唆される。また、玉井(1992、1997、2005)や飯塚(2010a、2010b)の研究からも明らかにされているように、シャドーイングには効果の偏在性が見られ、主にリスニングの中下位者にとって有益な効果をもたらす。リスニング問題で正答率 43%を下回ってしまう学生達には、シャドーイングにより聴解の下位技術である音声知覚を向上させることが不可欠であろう。その音声知覚を高めることでより多くの資源がリテンションに配分され、メモを取ることが許されない Q74 や Q76 の正答率向上にも役立つと考え

られる。Q11 や Q15 の問題に対してはリーディング活動などにより語彙レベルの底上げをする
 しかなく、特に医療通訳をテーマとする本授業においては、専門用語の獲得は必須である。

これまで考察してきたように、上記 6 問のデータ量のみでは学生が持つ語学力の弱点領域
 を一般化することは難しい。しかし表出した問題点を可能な限り分析し、その対策方法を予め
 学生に伝えることで、学生側もより明確な方向性を持って学習に取り組めるのではないかと考
 えた。以上のことを基盤に置き、本アプローチによる指導を実践した。

5. 普通教室における Consecutive Interpreting Approach の実践

ここでは Fig.1. の各手順を実践する上で特に留意した点について触れる。

5.1 ① SL

染谷(1996)によると、シャドーイング練習に適した音声教材のスピードは、初中級者でおよ
 そ 120-140 wpm、中上級者で 140-160 wpm が適当とされている。今回授業で用いた音声教
 材のスピードは中上級者用の上限に近い 154 wpm に達していたためシャドーイングの困難さ
 が予想された。そのため昨年度のアンケート調査結果も踏まえ、以下 Table 5. のプロソディー
 について事前に解説した。これらは多くの生徒が正確なアーティキュレーション獲得に時間を
 要した項目である。

Table 5. アーティキュレーション獲得に時間を要したプロソディー項目

プロソディー項目	指導例
[n] 音の後にくる母音の処理	an apple を a napple と捉えるように指示
[i], [e] 音の違い	I like <u>it</u> . 下線部は「エ」に近い音と指示 video [i] は「エ」、[e] は「イ」に近い音と指示
[r], [th]、[v], [f] の発音	口、唇、舌の断面図を用いて解説
等時性 ⁷	He wants to visit his friends. ● ● ● He wants to visit his friends in London. ● ● ● ● ●印に強勢を置き、等間隔で読むように指示

5.2 ② Shadowing

ヘッドセットを介さない一斉指導のため、当初学生の声が SL プロソディーに干渉してしまうこ
 とが懸念された。しかし教室にはスピーカーが数台設置されていたため、音声教材の音量を
 比較的大きめに再生し、SL のプロソディー情報と学生の声とをバランス良く調整した。ここでは
 SL の内容を意識させつつ、ほぼ追従できるようになるまで何度もシャドーイングを行い、音声
 を徹底的に模倣させた。

5.3 ③ SL Analysis

文法の解説だけではなく、正確な日本語訳を心がけるためにテキストの巻末にある医療系専門用語リストを活用した。この語彙リストは英語とその対訳のみの記載であったため、各学生にページを割り振り、発音記号や詳細な語彙の意味まで調べさせた。それらのノートを回収後 Scan Snap S1500 を用いて PDF 化し、ホームページ⁸ 上にアップロードした。これらをもとに各自語彙表を作成するように指示した。

5.4 ④ Parallel Reading & Shadowing

パラレル・リーディングとシャドーイングを交互に繰り返し、授業で扱った英文を最後までシャドーイングできるように指導した。前述したとおり、普通教室でのシャドーイングに対してはその効果や実践環境面において懐疑的であったが、意外にも学生が意欲的に取り組んでいたのは嬉しい誤算であった。これは個人の声が大勢の声に埋もれてしまうことで、各学生が気兼ねなくシャドーイングに取り組めたのではないかと考えられる。

5.5 ⑤ Listening and Note-Taking

テキストで扱った英文は比較的短い会話文であったため、リテンションに頼りがちなノートテイキングになってしまった。そのため、定期的に副教材⁹として長めのモノログを準備し、学生と共にノートテイキングの手法を考えた。Table 6. は SL とそれに対して学生が考えたノートである。

Table 6. SL とそれに該当するノート

SL			
① Tamiflu is an oral anti-viral drug for the treatment of influenza A or B.	② Dozens of children under the age of 10 and teenagers have suffered mental or neurological disorders, including abnormal behavior, after taking Tamiflu.	③ Thus the Health, Labor and Welfare Ministry issued emergency instructions to prohibit doctors from prescribing it to patients aged 10 to 19.	④ The ban on Tamiflu does not apply to children under 10 because they are at risk of dying from the influenza that Tamiflu is known to treat effectively.
該当ノート			
① Ta 口 抗ウ 治 flu	② 多子 10-10代 被る 精神 異常	③ Thus hlw iss 緊注 禁	④ 禁 Ta ×app 子↓10 risk 死

AB	aft Ta	医 処 10-19	flu Ta 知 治 効果的
----	-----------	-----------------	----------------------------

5.6 ⑥ Reproduction both in L1 and L2

リプロダクションの全体指導では Power Point を活用し、スクリーン上に Table 6. の日本語文字列を一部ずつ呈示しながら L2 による口頭アウトプットを促した。ほぼ全体を再現できるようになった時点でペアワークに移行し、上記 Table 内の番号ごとに、一方は L2 で、その相手には該当部分を日本語に置き換えさせた。尚、この練習時の発表風景はビデオに収め、学生の許可を得てホームページ上に掲載¹⁰してあるので参照されたい。

5.7 ⑦ Comparison between SL and IL in Written Format

手順⑥は口頭によるリプロダクションであるが、ここでは逐次ノートの日本語文字列を見ながら、SL を筆記再現させる活動を行った。書き終えた時点で SL と比較させ、正確に書き出せなかった部分を赤ペンで修正させた。医療系専門用語には比較的長い綴りの語が多く、学生がそれらの綴り方に関して問題を抱えていることが観察された。

5.8 ⑧ Comparison between SL and IL via Shadowing

SL の音声に基づき、上記⑦の修正原稿を見ながらシャドーイングを行った。学生全体の声を聞いていると、Table 5. 内で指摘したプロソディーがやはり課題となったため、該当部分をその都度指摘し、プロソディーの定着を図った。

前述したとおり、本アプローチを普通教室で実践するにあたっては当初困難が予想されたが、シャドーイング活動を含め、学生は積極的に参加してくれた。では、学生側は本アプローチに対してどのような感想を抱いているのか。次節では 2 段階のアンケート調査から学生の意識を探り、本アプローチを普通教室でより良く機能させる方法について考察する。

6. Consecutive Interpreting Approach に関するアンケート調査

6.1 アンケート調査(1)

このアンケートでは前節で示した①～⑧の各項目における指導内容及び方法について、学生に 5 件法(1: 改善を要する, 2: やや改善した方が良く, 3: どちらとも言えない, 4: 良い, 5: とても良い)で答えてもらった。また、1 及び 5 と答えた場合、それに対するコメントも書くように求めた。外国語学部を持たない大学等でプロソディーを重視した通訳・語学教育を行う場合、普通教室という環境下で指導せざるを得ないことが今後も予想される。では LL/CALL 教室の利点を知らない学生達は本アプローチに対してどのような感想を抱いたのか。ここではそのような学生側の視点から本アプローチを概観する。Table 7. は調査結果を上記の基準に沿

って表した記述統計値である。

Table 7. アンケート(1) 調査結果

	Mean	SD	※
① SL	3.06	1.048	8
② Shadowing	3.53	.847	1
③ SL Analysis	3.29	.593	5
④ Parallel Reading & Shadowing	3.49	.756	2
⑤ Listening & Note-Taking	3.27	.741	6
⑥ Reproduction both in L1 & L2	3.29	.663	4
⑦ Comparison b/w SL and IL in Written Format	3.31	.627	3
⑧ Comparison b/w SL and IL via Shadowing	3.26	.606	7

N=75 ※は平均値の高さの順位を表す

また、上記アンケートに1または5と答えた項目番号とそのコメントも Table 8. に併せて掲載する。

Table 8. 上記アンケートで1及び5と答えた項目番号とそのコメント

1と答えた項目番号とそのコメント	
項目番号	コメント
①	CD は速すぎると思う。Shadowing するにもできない。
①	速い。ネイティブのスピードで良いのかも知れないが...
①	速いのと遅いのがあると良い。
5と答えた項目番号とそのコメント	
項目番号	コメント
②	シャドーイングは自分の耳を使って言葉を聞きつつも話を真似して声を出すから、できるようになってくると楽しくなる。
②	友達に前より発音が良くなったと言われたので、shadowing のおかげだと思った。
① ② ③ ④ ⑤	Consecutive Interpreting Approach はとても良い学習法だと感じました。1～8までで、7、8までやるのは結構大変で難しかったです。1～6は自分でやっていく中で成果が見られたので5と答えました。
⑥	英語を話すことが中心で高校などの英語の授業より楽しかったです。
④	シャドーイングしやすい。頭(目)と耳で覚えらる。
②	Shadowing は英語が上達しそうな気がした。
①	ネイティブの音声で学習できて良かった。
② ④ ⑥	授業中に友達と英語を言い合ったり、shadowing したりするのが楽しかったです。

⑥	遊んでいるみたいで楽しい。これで英語ができるようになるなら美味しいと思う。
① ⑥	今まではシャーペンを走らせていたので、口を動かすことは新しいと思った。書くより話す方が大切になりそうなのでこれから使えそう。
④	意味を理解した上で発音するのは良い。
①	CD はネイティブの速さで良いと思います。
② ④ ⑥	継続的に行っていききたい。

6.2 アンケート調査(2)

アンケート調査(1)の8項目をさらに細かく分け、それぞれに対する学生の感想を5件法(1: 全く反対, 2: やや反対, 3: どちらとも言えない, 4: やや賛成, 5: 全く賛成)を用いて調査した。Table 9. はこの基準に則して学生の感想を表した記述統計値である。

Table 9. アンケート(2)調査結果

	Mean	SD	※
SL			
1. 教科書付属の音声 CD の速さは適切である	2.77	1.134	16
2. 医療英語テキストとして内容は適切である	3.79	.963	3
Shadowing			
3. 普通教室での shadowing は周りの人の声がじゃまになる	2.53	1.107	19
4. 自習として各自練習した方がやりやすい	3.13	1.057	14
SL Analysis			
5. 本文を全部和訳した方が良い	2.21	1.056	20
6. Vocabulary ノートの作成は専門用語理解に役立つ	2.67	1.155	17
Parallel Reading & Shadowing			
7. 本文を見ながら音声に合わせて読むことは発音理解に役立つ	4.12	.821	1
8. 本文を見ずに shadowing することは内容理解に役立つ	3.41	1.028	5
Listening & Note-Taking			
9. 英文を聞きながらノートテイキングをすることは難しい	3.92	.818	2
10. ノートテイキングの方法をもっと学びたい	3.29	1.100	8
Reproduction in L1 & L2			
11. 上記ノートを見ながら英文を作ることはスピーキングに役立つ	3.36	.925	6
12. 上記ノートを見ながら日本語に訳すことは内容理解に役立つ	3.31	1.013	7
Comparison b/w SL and IL in Written Format			
13. 自分の書いた IL と SL の比較は文法力向上に役立つ	3.25	1.104	12
14. 自分の書いた IL と SL の比較は綴りの獲得に役立つ	3.44	1.030	4
Comparison b/w SL and IL via Shadowing			
15. 自分の書いた IL を基に shadowing すると表現の違いに気づく	3.16	.945	13

16. 自分の書いた IL を基に shadowing するとリスニングに役立つ	3.28	.952	9
Consecutive Interpreting Approach 全般について			
17. 本アプローチは英語コミュニケーション力の獲得に役立つ	3.27	.963	11
18. 本アプローチは医療通訳訓練法として役立つ	3.27	.875	10
19. 本アプローチにより通訳に興味をわいた	2.61	1.218	18
20. 本アプローチを LL/CALL 教室で実践したい	3.00	1.174	15

N=75 ※は平均値の高さの順位を表す

6.3 アンケート調査結果についての考察

アンケート(1)の調査結果を見ると、すべての項目で 75 名の平均値が 3.0 を超えていることから、概ね学生は本アプローチを肯定的に受け入れていたと考えられる。また、最右列の数値が示すように Shadowing の平均値が最大となり、これは指導者の懸念していたこととは反対の結果となった。ここからは以下の 2 点が示唆される。まず、前述のリスニングテストの結果や Table 8. のコメントから推察されるように、学生達はプロソディーを重視した指導をあまり体験したことがなく、それ故、シャドーイングに新鮮さを覚えたのではないかということ、そしてもう一つは普通教室においてもシャドーイングは実践できるという点である。しかし、「実践できる」=「効果がある」という等式はなりたないため、今後その効果については量的アプローチからの分析が必要となるであろう。そして今回、特に留意すべき点は 8 項目の中で SL の平均値と SD 値がそれぞれ最低、最高に達してしまったことである。本アプローチでは SL の音源が主な教育資源となる。そのため、染谷 (ibid.) の指摘に基づき 140 wpm 程度の音源や、もしくは Table 8. のコメントにあるように、2 種類のスピードを持つ音源等を注意深く選ぶ必要があるであろう。そうすることで SD の値が抑えられ、本アプローチはより広いレベルの学生に受け入れられたと考えられる。

次にアンケート(2)の調査結果を考察する。平均値の上位項目の中から、逆転項目にあたる 9. と学生の具体的な活動に該当しない 2. を除き、上位 5 項目を抽出すると Table 10. のとおりとなる。

Table 10. アンケート (2) における平均値の上位 5 項目 (9. 及び 2. は除く)

	Mean	SD
7. 本文を見ながら音声に合わせて読むことは発音理解に役立つ	4.12	.821
14. 自分の書いた IL と SL の比較は綴りの獲得に役立つ	3.44	1.030
8. 本文を見ずに shadowing することは内容理解に役立つ	3.41	1.028
11. 上記ノートを見ながら英文を作ることはスピーキングに役立つ	3.36	.925
12. 上記ノートを見ながら日本語に訳すことは内容理解に役立つ	3.31	1.013

ここでも学生達は、シャドーイングなど、音声を扱った活動を有益と捉えていることが観察された。さらに、これらの 5 項目は上から順に Fig.1. の④ Parallel Reading & Shadowing、⑦

Comparison b/w SL and IL in Written Format、⑥ Reproduction both in L1 & L2 に該当し、Table 7. で示した平均値順位とほぼ合致する。従って、本アプローチを実践する際に、④、⑥、⑦ を活動の中心に置くことで、より学習意欲を喚起させる授業展開が可能となるであろう。

では、指導者の意図するところと学生達の感想が乖離してしまった項目は何であろうか。Table 11. は平均値が 3.0 を下回ってしまった項目である。

Table 11. Mean 値が 3.0 を下回る項目

	Mean	SD
1. 教科書付属の音声 CD の速さは適切である	2.77	1.134
6. Vocabulary ノートの作成は専門用語理解に役立つ	2.67	1.155
19. 本アプローチにより通訳に興味があった	2.61	1.218
3. 普通教室での shadowing は周りの人の声がじゃまになる	2.53	1.107
5. 本文を全部和訳した方が良い	2.21	1.056

最も平均値が低かったのは項目 5. の「本文を全部和訳した方が良い」となった。最初に触れたように、今回「医療通訳を兼務できる看護師の育成」という構図の中で本アプローチを実践してきた。そのため SL を正確な日本語に訳すことも重点的に指導したが、項目 6. 及び 19. の平均値を併せて鑑みると、学生達の意識は訳すプロセスを経る「通訳」ということよりも「英語」そのものに向けられていることが明らかとなった。シラバスでは本アプローチに基づく指導を掲げているものの、やはり 4 年間で 15 回という外国語学習環境下にあつては、より多くの時間をその外国語をダイレクトに扱う活動に費やすことが賢明であろう。そして今回の研究で新たな気づきとなったことは、3. 「普通教室での shadowing は周りの人の声がじゃまになる」の平均値が 2.53 という極めて低い値に留まったことである。つまり、普通教室ではプロソディーの正確な把握が期待できないとする指導者側の懸念は、学生側の感想と大きく乖離することとなった。Table 10. の結果や学習者の動機付けが学習効果に与える影響は大きいとされる点を考え合わせれば、本アプローチは普通教室においても機能するのではないかという手応えを得た。

考察のまとめとして、本アプローチを普通教室でより良く機能させる方法について考えてみたい。昨年度のアンケートでは、本アプローチを用いると教科書の進度が遅くなるという指摘があった。その問題を解決するために、Fig.1. の各項目を (a) 家庭学習に委ねるもの、(b) 授業で取り上げるもの、と 2 つに区分する方法が考えられる。Table 12. はアンケート調査結果に基づき、平均値が高い項目を授業で重点的に扱い、それ以外の項目は家庭学習に委ねるという視点で本アプローチをまとめたものである。

Table 12. アンケート結果に基づく Consecutive Interpreting Approach の効率化

Consecutive Interpreting Approach の各項目	家庭学習	授業
① SL	○	
② Shadowing	○	
③ SL Analysis	○	
④ Parallel Reading and Shadowing		○
⑤ Listening and Note-Taking		○
⑥ Reproduction both in L1 and L2		○
⑦ Comparison b/w SL and IL in Written Format		○
⑧ Comparison b/w SL and IL via Shadowing	○	

①～③:各自予習。授業では SL Analysis 中の難解な部分のみを解説。

④～⑦:実践授業。特に逆転項目であった⑤は平均値が上位であったため、
十分な指導を要する。

⑧:⑦の原稿をもとに各自復習。

このような授業展開をすることで効率が高められるだけでなく、学習意欲をも喚起する指導につながっていくと考察される。また、アンケート調査からの知見は一般の英語・通訳教育にも応用できるであろう。

7. おわりに

本研究では医療通訳教育という枠組みの中で、Consecutive Interpreting Approach が普通教室でどう機能するのかをアンケートに基づく質的分析から調査した。プロソディーを重視する本アプローチは LL/CALL 教室に特化させた指導法であるが、分析結果から普通教室でも機能することが示唆された。今後は同環境下での実践を継続し、本アプローチがもたらす効果について量的側面から分析してみたい。

.....
【著者紹介】飯塚秀樹 (IIZUKA Hideki) 英国バース大学通訳翻訳修士課程修了。自治医科大学看護学部講師。現在、(財)全国商業高等学校協会英語研究部専門委員として、全商英語検定問題作成にも従事している。

【註】

1. 最近接発達領域 (ZPD: zone of proximal development) (Vygotsky, 1978) とは、学習者が現在いる発達段階のすぐ上の領域を指し、他者の助けを借りればその領域にある課題を遂行できることを意味する。
2. 中間言語 (IL: interlanguage) とは言語学習者が身につけている第二言語の言語知識体系を指す。

3. Lenient Scoring の基準は以下のとおりとする。
- カンマ、ピリオド、引用符など音声に関係のない表記の有無は採点に考慮しない。
 - 文頭及び固有名詞はじまりの大文字表記漏れ判定から除外する。
 - 原文の単語が推測できるわずかな綴り上の誤り、名詞の単複、動詞の一致・時制などの語形変化を容認する。
4. ここで用いた練習問題は旺文社の『新 TOEIC テストハイパー模試』から抜粋した。
5. TOEIC リスニング低正答率問題 ○は正解、()内の数字は選択率を表す。

Q11. What folder do you want the document in?

- (A) Put it in the drawer for now. ○ (23%)
 (B) Let's fold it into thirds. (35%)
 (C) That's the letter from Bradford Electronics. (42%)

Q15. You made reservations for the whole group, didn't you?

- (A) Just let me know when everyone in the group gets back. (19%)
 (B) Yes, I will introduce you to the whole group. (61%)
 (C) I told the restaurant there will be ten of us. ○ (20%)

Questions 74 through 76 refer to the following speech.

Thank you for coming to the teachers meeting today. Due to some recent budget cuts, we no longer receive funding from the state to pay for music classes for our students. As principal of Jackson Elementary School, I am going to continue our music program through donations from the public. The first event will be a competition in which students will get sponsors to donate a certain amount of money for each lap they run. The children will have thirty minutes to run as many laps around the gymnasium as possible. This should bring in about \$15,000. That is an average of \$30 per student. The race is in three weeks. Please give all your students a donation form. Thank you for your help.

Q74. Who is the speech being given to?

- (A) parents of elementary school students (35%)
 (B) the school principal (17%)
 (C) music program coordinators (25%)
 (D) school teachers ○ (23%)

Q76. How long is the race?

- (A) Half a mile. (25%)
 (B) Half an hour. ○ (24%)
 (C) Around an hour. (15%)

(D) In 3 weeks. (36%)

6. TOEIC リーディング低正答率問題 ○は正解、()内の数字は選択率を表す。

Q104. The job requires someone ----- a master's degree and at least five years of experience.

(A) of (23%) (B) for (40%) (C) with ○(21%) (D) in (16%)

Q107. At a recent industry conference I met a ----- college roommate of mine.

(A) farmer (19%) (B) former ○ (16%) (C) prevalent (16%) (D) previous (49%)

7. 等時性とは1つの強母音と次の強母音が現れる間隔がほぼ一定になろうとする傾向を指す。

8. 自治医科大学看護学部英語ホームページの URL は以下のとおり。

<http://jmedn.web.fc2.com/>

9. 副教材としてセンテージラーニング社の『Medical English Clinic』を用いた。

10. 発表の様子は以下の URL に掲載してある。

<http://jmedn.web.fc2.com/asets/presentation.mp4>

【引用文献】

Benfield, J. (2011). A Half Century Perspectives of English in Japanese Medicine. *Journal of Medical English Education*, Vol. 10, pp. 7-12.

Inoue, M. and Ihara, T. (2011). *Because We Care.*, 4th ed., Tokyo: Cengage Learning.

McLaughlin, B., Rossman, T. and McLeod, B. (1983) Second Language Learning: An information-processing Perspective, *Language Learning*, 33, 135-158.

Nishihara, T., Nishihara, M., and Brown, T. (2010). *Medical English Clinic*. Tokyo: Cengage Learning.

Ojamann G. A. and Whitaker H. A. (1978). The bilingual brain. *Arch Neurol*, 35: 409-412.

Uemura, K. (2009). Medical English Education in Japan: Past, Present & Future. *Journal of Medical English Education*, Vol. 8, pp. 7-11.

Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in Society: The Development of Higher Psychological Processes*, Harvard University Press, 1-91.

飯塚秀樹 (2009) 「通訳訓練法による英語力向上の有意性と語学指導への応用－最新の SLA 研究の視座を交えて－」『通訳翻訳研究』第 9 号: 107-122.

飯塚秀樹 (2010a) 「逐次通訳メソッドによるアウトプット練習が英語コミュニケーション能力に与える影響」－リプロダクションとシャドーイングを統合した授業から－『STEP Bulletin』vol.22 (財)日本英語検定協会: 103-114.

飯塚秀樹 (2010b) 「Consecutive Interpreting Approach によるプロンディー重視の指導法が第二言語習得に与える影響」『通訳翻訳研究』第 10 号: 38-58.

旺文社編 (2006) 『新 TOEIC テストハイパー模試』旺文社

大木俊英 (2011) 「シャドーイング開始期における学習者の復唱ストラテジーの分類」『Kate Journal』 vol. 25:33-43.

門田修平 (編) (2003) 『英語のメンタルレキシコン』松柏社

- 門田修平 (2007)『シャドーイングと音読の科学』コスモピア
- 教育出版 (2010)『*Lingua-Land English Course Revised Edition*』教育出版
- 小松達也 (2005)「大学・大学院における通訳関連プログラムのあり方」日本通訳学会第 6 回年次大会 (2005 年 9 月 23 日青山学院大学)におけるシンポジウム基調講演要旨
[Online] <http://www.cl.aoyama.ac.jp/~someya/10-JAIS/6thTaikaiData/2005-Sympo.htm>
- 鈴木久実 (2007)「シャドーイングを用いた英語聴解力向上の指導についての検証」『STEP Bulletin』vol.19 (財)日本英語検定協会:112-124.
- 染谷泰正 (1996)「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について—第 47 回通訳理論研究報告要旨」『通訳理論研究』(通訳理論研究会)第 6 巻 2 号:27-44.
- 玉井健 (1992)「“follow-up” の聴解力向上に及ぼす効果および “follow-up” 能力と聴解力の関係」『STEP Bulletin』vol.4 (財)日本英語検定協会:48-62.
- 玉井健 (1997)「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」『時事英語学研究』36, 105-116.
- 玉井健 (2005)『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』風間書房
- 鳥飼久美子 (2001)「医療と通訳:コミュニケーションの視点から」『Journal of Medical English Education』Vol.8:109-114.

